

山の翼

アフガニスタン山の学校たより

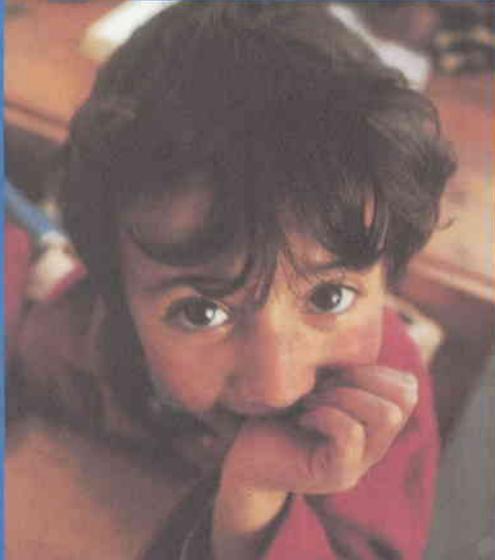
02号



▲さっそく、サッカーボールを追いかけて遊ぶ
入学したばかりの1年生(2004年4月)▼

山の学校の会・代表 ポーランド村へ!

【別紙】第1回総会のご案内
現地報告会・大阪のご案内



「山の学校の会」事務局立ち上げから半年あまり、「翼」第1号の発行と発送、会としての初のポーランド訪問とあわただしい日程が続く中、全国での支援の輪は確実に広がり、会員が400名を超えました。10年間の支援を継続するためには会員数500名以上が理想と考えていましたので、400名突破は、目標への大きなはずみとなります。これも皆様のご支援の賜物です。また、4月の訪問で、これからの支援の道筋がかなり見えてきました。現地では、継続的な支援こそ子どもたちや人々への大きな励みになると実感しました。

2004年8月

長谷川洋海

これからもよろしくお願いたします。

山の学校の会・代表 ポーランド村へ!

今年4月、当会代表がアフガニスタン・ポーランド村を訪れました。現地では、文房具をはじめとする日本からの様々な物資を子どもたちに手渡したほか、今後の支援の方向性を検討するために、先生や村人と活発な話し合いがもたれました。

報告・長倉洋海

アフガニスタン 山の学校支援の会・代表



山の学校のサフダル校長(右)と、購入したサーフの前で。車が何とか5年間はもってほしいが…。

4月2日、成田を発ち、パキスタン経由で翌3日、カブールに到着。在カブールの会の協力者、安井さんのオフィスに荷を下ろし、郵便局へ。日本から発送していたダンボール8箱全部を無事に引き取り、ホテルとする。翌朝、チャーターした車で、ポーランドへ。悪路を5時間かけて到着、先生たちが学校から飛び出してきて迎え入れてくれる。授業中の子どもたちは私を見るなり、「また来てくれたんだ」というように明るい笑顔を浮かべてくれた。子どもたちが、昨年購入した机と椅子で勉強している姿にうれしくなる。ドイツのNGO「オッフアリン」が壁と床、天井を改修。便所も作られ、学校は見違えるようになっていた。

さっそく、校舎横で「アフガニスタンの子どもにリュックを贈る会・札幌」の市田さんとジャージ100着、当会事務局で購入した筆記入れやペン、定規、消しゴムなどの文房具を配る。色とりどりのリュックサックや文房具を手に、子どもたちはうれしそう。その夜、宿泊先の校長サフダルの家到大

勢の村人が集まる。タンバリンを鳴らしながら、故郷の歌を披露してくれる老人、それに合わせて手を打ち鳴らす子どもたち。壁に掛かったマスタードの写真がその姿を温かく見ているような気がした。

翌日、中学校をどうするか、サフダルと話す。一時、中学建設を計画していたドイツのオッフアリンが作らないと聞いたからだ。6教室ある小学校を午前、午後の2部にすれば、3教室が空くので、それを中学の授業に充てることに決定。生徒がたくさん集まり教室が足りなくなれば、その時点で考えようということになった。中学の女性教師3人に、5月開校に向けて準備をしてくれるように頼む。

車は当初、マイクロバスを思っていたが、みんなが冬でも通えるオフロード車がいいということで、トヨタ・サーフを購入しようということに。車の運転手ではもめた。それぞれが違う人を推すので、私は混乱したが、結局、下のバザラックの町から通っている先生アーメドを運転手にすることに。運転の経験もあり、人柄もいい。教師

と兼任なので、手当も安くすむ。

前は車での移動図書館を考えていたが、先生たちと協議の結果、学校に開設することに決める。貸し渋りが心配だった生徒たちへの貸し出しも、きちんとすると確約をもらう。私たちが夏までに、日本から図鑑や写真集などを送ることを約束した。

カブールに取って返し、車のディーラーを営む安井さんの夫、サプールにサーフを見つけてるように頼むと、買い物に走り回る。まずは長靴。みんな満足な靴がなく、冬が

つらいと聞いたからだ。市場で、イタリアや英国製の中古をサイズを大小取り揃え200足。それから、電気。最初は発電機をと思っていたが、川で簡易発電している電気を分けてもらえることに。そのための延長用コード300メートル、蛍光灯やスイッチなど買う。ほかにスチール製の本棚、BBCが出しているベルシャ語の絵本なども購入。放牧中に転び、岩で頬に大きな傷をつくっていたアズイマを思い出して、医薬品と包帯なども買う。冬用のストープの購入費と燃料費のお金は安井さんに託し、再びポーランドへ戻った。

学校の昼休み、子どもたちは、会からプレゼントされたサッカーボールで遊ぶことに夢中だ。足の不自由な子ども仲間入りして、岩でこぼこの狭い道でボールを追いかけている。校舎の裏にあった空き地は、サッカーにはぴったりだったが、羊用の草がつぶされると土地を借りている農民に抗議され、使用できなくなってしまう。道路で遊ぶしかない子どもたちが気の毒だった。女の子はもらったドッジボールでバレーボ

ールをしている。ドッジボールを教えるが道路は狭くて、スペースが十分とれなくてうまく教えられない。いつか、運動場用の土地を借りられればいいなあと考えた。

滞在中、子どもたちの生活を追う。子どもたちは5時には起き出して、牛や羊を放牧させる。すごい山の斜面まで登っての放牧なので、ついていくだけで息が切れてしまう。8時頃、母親や姉さんが交替に来てくれて、子どもたちは初めて学校に行ける。でも、家族が病気になった時や、小麦の収穫期には子どもたちは手伝いで学校を休む

しかない。夫が出稼ぎの家庭では、子どもを学校に行かせられないケースもあった。母親を何とか説得しようとしたが、なかなかかうんとは言わない。やはり生活が第一なのだ。オッフアリンがそんな女性のために識字教育をここで始めるといっているので、喜んで、協力することを代表に約束する。

別れの日、子どもたちを前に、勉強に励んでほしいとあいさつ。そのあと、サフダルが「がんばった子は日本に行ける」と言うのでびっくり。本当はサフダル自身が行きたいのだが、それを聞く子どもたちの目が輝いているのを見て、何も言えなくなる。会の体制が整い、余力ができたなら、この子たちを日本に招待できればいいなあと考えた。

滞在中、村人たちはよく「朝御飯を食べたいけ」「お茶を飲んでいけ」と誘ってくれた。サフダルに「私が支援を始めたからだろうか」と聞くと、「違うよ、オマール(私の通称)が村のことを忘れずにいてくれるのがうれしんだ」と言うので胸が熱くなった。

スタッフ、物資集めに奔走！
 子どもたちの笑顔のために、
 校庭に並べられた色とりどりの文房具やボールに目を輝かせている子ども達。長倉さんが撮った写真には笑顔があふれている。見ていてうれしくなった。

春、山の学校も新学期。150人の子ども達全員に文房具を贈ろうと、鉛筆、消しゴム、定規などを買い集めたが、筆入れの数が揃わない。お店をあちこち見て回ったが15個足りない。タイムリミットで代わりの物を入れて送ったものの、同じ物を買えない子のことが気になる。



- 山の学校へ持参したもの
- ★サッカーボール3個
 - ★ドッジボール2個
 - ★空気入れ1個
 - ★鉛筆156本
 - ★鉛筆キップ336個
 - ★筆入れ153個
 - ★消しゴム150個
 - ★3色ボールペン37本
 - ★定規151本
 - ★ABC型抜付定規10本など

何とか数を揃えて長倉さんへ渡せたのは、現地へ出発する前日の夕方だった。支援のお願いや会報などの発送8時間連続作業も、筆入れを求め歩き回ったことも、みんな子ども達のあの笑顔につながっているのだと実感。文字通り、顔の見える支援だ。

8月には、買い揃えた本にペルシャ語訳をつけて送る予定だ。これからも、子ども達が安心して勉強が続けられるよう必要な物を送り届けたい。支援してください。くださる方々のたくさんのお思いも一緒に話め込んで。佐留川征志

会員の皆様へ、山の学校の先生たちからお礼の手紙が届きました。

Thank You note
 Many thanks from the Japanese people especially from Hiroshi. Hiroshi is like our brother and helped the people of Parandai and he has brought some helps for our school. As he knows this school is located in the remot mountains of Parandai and they are very poor people. Many students here are studying in this school have lost their mothers and fathers during the 25 years war. Once again we want to thank from Hiroshi and his NGOs that helped us in the past years and we hope that your help continue in the further in sincerely yours,
 Teachers of the Parandai's school.

日本の支援の会の皆様へ、心からお礼を申し上げます。ヒロシは私たちにあって兄弟のような存在で、パンシールの人々に援助の手を差し伸べ、私たちの学校に様々なものを贈ってくれました。ご存じのように、私たちの学校は人里離れたパンシール渓谷に位置しており、人々の生活は恵まれたものではありません。私たちの学校にも、25年に及ぶこの戦争で肉親を失った子どもたちが数多くおります。最後にもう一度、皆様へこれまでの援助に心からの感謝を述べたいと思います。そして、これからもよろしくお願ひいたします。

親愛をこめて
 ポーランド小学校教員一同

帰国のためカブールに戻ると、サブールが見つけてくれた車が到着していた。日本から、ドバイ、イランを経由してきた93年製のものです。土ほこりにまみれているが程度はいい。整備に1週間かけ、先生に引き渡してくれるという。大きな買い物だから、サブダルやアーメドには「整備も受けて大切に使うこと。ただ、急病人が出たら、最優先で使って」と話す。4年生のアブドラが水泳中、落ちてきた岩で足を怪我し、その後切断するしかなかったが、もっと早く治療を受けられたら足を切らなくてすんだのではと聞いていたからだ。

5年は持つてほしいと思う。この報告書を書いてきた5月27日、安井さんから再び、電話。サブダルが1カ月に一度の定期報告に来てくれているという。サブダルは、「車は快調、生徒たちも元気」と明るい声。ただ、門番のおじいさんが山にマキをとりに行つて、地雷で片足を失ったという。ショックだったが、車でそのおじいさんを下の町にある病院まで運ぶことができたし、ほかに急病の女性を運んだという。医者も診療所もない村、これからも、車が役立てばと思う。



学校に続く道で、子どもたちにドッジボールを教える。

皆様からのおたより

●長倉さんの現地報告会に行きました。「ここにいる人達にはずっとアフガンのことを忘れていけないでほしい」という長倉さんの言葉が耳に残っています。(北海道・NK)

●アフガニスタンの将来を担う子ども達に学校教育をさせてあげたいという気持ちは、マソード司令官の遺志だと思いますし子ども達の願いでもあります。少しでも支援が出来たらいいなと思つています。(宮崎・KK)

●長倉さんの写真が大好きで、そこに写る人々が幸福であつてほしいと願っています。(奈良・NT)

●以前より、こんな会ができればいいなと願っていたものです。(神奈川・AT)

●紛争地域で生きる子ども達は、その過酷な状況に反して、とてもビューアで表情が生命の豊かさを感ぜさせてくれるのが印象的です。(北海道・KH)

●お名前はいニシャルに変えていただきました

●第1回総会を開催します!! [東京]

今年2月に立ち上がった当会の設立総会を開催いたします。活動報告やスライドショー、交流会なども予定していますので、ぜひご参加ください。当日は会員証もお配りする予定です。申し込み方法などの詳細は、別紙「第1回総会のご案内」をごらんください。

[日程] 9月20日(月) 【会場】 武蔵野スイングホール

●現地報告会&スライドトークショー [大阪]

4月に訪問した、山の学校への支援経緯報告を行います。詳細は、別紙「現地報告会・大阪のご案内」をごらんください。

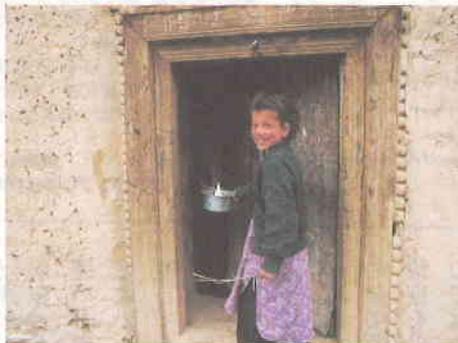
[日程] 9月25日(土) 【会場】 大阪市立総合生涯学習センター

【今後の活動】●8/10、15写真展「ソノボの少年」ギャラリー市田(札幌) ●9/12朝8:25放映予定「NHK総合」課外授業「うごこ先陣」出演 ●12月発行予定「写真集」きみが微笑む時(福音館) ●12/11、25ちひろ美術館(東京)にて企画展開催。



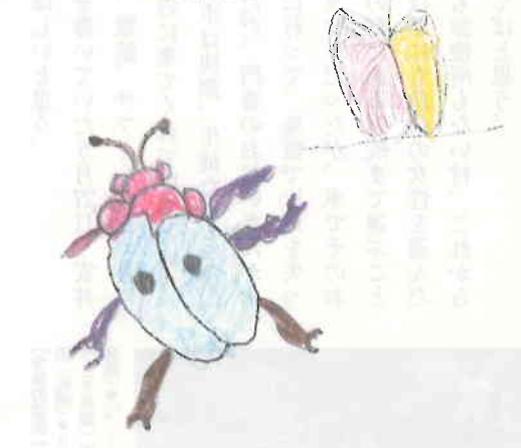
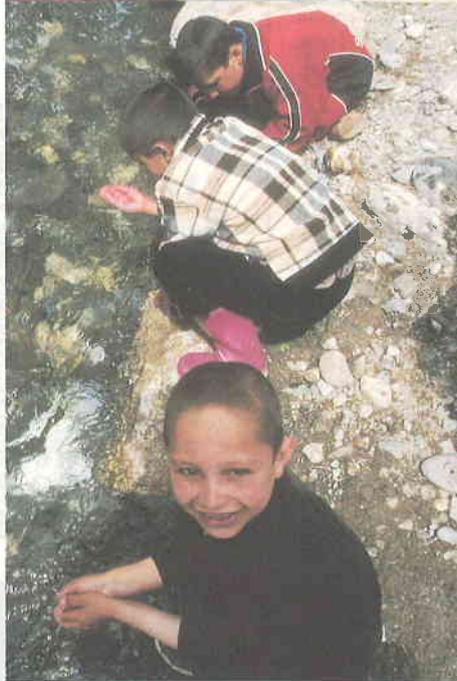
山の学校 ふおと ぎやらりい

山の学校と子どもたちの様子を
もっと知りたい!という方は、
当会ホームページをごらんください。
[www.h-nagakura.net/
yamanogakko/gallery.html](http://www.h-nagakura.net/yamanogakko/gallery.html)



(写真上段左から)●面倒をみている羊
をもっと抱き上げる。●1冊の教科書を3人で
見る●家畜の世話を終え、家に入る
●学校が終わって、家で昼食●昼休み、
川の水を飲む●覚えた字を書いている
●長靴をさっそく履いた子たち

☆イラストは、山の学校の子どもたち
によるものです。



アフガニスタン 山の学校の会

アフガニスタン 山の学校支援の会

〒187-0032
東京都小平市小川町 1-1071-15 比留川 気付
FAX: 042-345-7805
URL: www.h-nagakura.net/yamanogakko
郵便振替口座: 00160-1-667404

●お問い合わせはファックスでお願い致します。

次号の発行は今年12月を予定して
います。当会や小誌『翼 ばあーん』へ
の皆様からのご意見・ご感想をお待
ちしております。左記連絡先までお
寄せください。

編集 ● 岩動紫 小島崇広 佐々木瑞紀
林道子 三輪ほう子
題字 ● 近藤理恵
印刷 ● (有)アドタック

当会では、会員の皆様から頂いた会費
はすべて、現地の山の学校支援に使っ
たことを原則としています。したがって、
国内での活動に必要な経費は、なるべく
自助努力(チャリティー売上金等)
によって充当していく方針です。つま
ましては、現地報告会(ラ이드・トー
ク)や交流会等の関連イベントに関し
ても、来場される方の参加費等の収入に
よって運営していくこととなりますの
で、皆様のご理解とご協力をお願い申
上げます。

「アフガニスタン山の学校支援の会」
は、写真家・長倉洋海が取材活動を通
じて出会った、パンシル渓谷ポラ
ンデ村の子どもたちの教育支援を目的
として設立された非営利の団体です。
2004年2月設立、以後10年間にわ
たり活動を続けていきます。